「施し」を乞う放浪者
―『未成年』のヴェルシーロフについて―

松　本　賢　一

1

ドストエフスキイの小説『未成年』（1875）の第一部は、主人公アルカーヂイ・ドルゴルーキイが、９年ぶりに会う実父アンドレイ・ペトローヴィッチ・ヴェルシーロフにまつわる様々な噂の真偽を確認しようとする過程を、その主たる内実としている。「ロスチャイルドになる」という「理念」を抱き(1)、一日も早くこの理念の実行に踏み切ろうと焦りながらも、ヴェルシーロフの招きに応じてアルカーヂイがモスクヴァからペテルブルクにやって来たのは、ひとつには、彼が10歳の時に記憶に焼きついた父と、その父が１年半ほど前にエムスの療養地で引き起こしたとされるスキャンダルとの甚だしい懸隔を埋めるためであったといえる。

アルカーヂイが人伝てに聞いた話では、内縁の妻ソーフィヤ(アルカーヂイの母)が居るにも拘らず、ヴェルシーロフはエムスで知り合ったアフマーコフ家の夫人カチェリーナに邪な恋心を抱き、それが叶えられないと知ると彼女の継娘リーヂヤを籠絡して結婚を申し込んだという。この噂話には尾鰭が付いており、ヴェルシーロフは、むしろカチェリーナ夫人の方が自分に惚れ込んでいたのだと彼女の夫アフマーコフ将軍に吹き込み、アフマーコフ家の平穏を乱して、果てはリーヂヤを自殺に追い込み、将軍の死期をも早めた、という。カチェリーナ夫人とも、リーヂヤとも親密な関係にあったセルゲイ・ソコーリスキイ公爵は、アフマーコフ家の悲劇の元凶であるヴェルシーロフに公衆の面前で平手打ちを喰らわしたが、ヴェルシーロフの方はこの公然たる侮辱に対して決闘を申し込むこともなく、今は財産上のことで公爵と

「言語文化」4-2：369－391ページ　2001.
同志社大学言語文化学会 ©松本賢一

裁判で争っているのである。

更に、これはペテルブルクに出て来てからのことであるが、ヴェルシーロフがリーヂヤに子供を産ませていた、苦行僧の着ける鎖の錘を着けていた、カトリックに改宗した、等々の噂を、アルカーヂイは周囲から聞かされなければならなかった。

自領の農奴の妻であったソーフィヤと関係を持ち、自分を産ませ、19歳の今日までその養育に何の関心も示さなかった父への屈折した思いはあるものの、アルカーヂイが耳にしたヴェルシーロフに関する醜聞の数々は、10歳の時の記憶に残る父の姿とは余りにも懸け離れていた。

10歳のアルカーヂイが会ったヴェルシーロフはまだ若々しく、美しかった。貴族ヴェルシーロフの血を享けながら、戸籍上は農奴の子であるアルカーヂイにとって、この時の父の姿は、モスクヴァの華やかな貴族社会の光彩に包まれたものであった。だが、少年を眩惑したのは父を取り巻く上流社会の空気ばかりではない。この時外国からたまたま一時帰国していたヴェルシーロフは、ある貴族邸で催される素人芝居の代役を頼まれ、グリボエードフの戯曲『知恵の悲しみ』(1825)の主役チャーツキイを演じることになっていた。アルカーヂイ少年は、この父の舞台を見たのである。今は19歳になったアルカーヂイは、その時の印象をヴェルシーロフにこう告白している。

> (・・・)アンドレイ・ペトローヴィチ、あなたが舞台に出ていらしたとき、僕は夢中になって涙さえ流しました。どうしてか、何のせいか、わかりません。どうして歓喜の涙が出たんだろう？――その後９年の間ずっと、僕はこのことを思い起こしては不思議な気持になったものです！僕は息を詰めてあの喜劇を見ていました。もちろん僕に分ったのは、彼女が彼を裏切ったのだということ、愚かで彼の足指一本の値打ちも無い奴らが彼のことを笑いものにしているのだということだけでした。彼が舞踏会で一席ぶった時、僕は理解したんです。彼が侮辱され、辱められたのだということ、彼がこの哀れな奴らを非難しているのだということ、そして、それでも彼は偉大なのだ、実に偉大なのだということを！(・・・)車寄せのところでチャーツキイが

「馬車を、馬車をまわせ！」と叫んだ時(あなたの絶叫は素晴らしいものでしたよ)、僕は我を忘れて椅子から立ち上がり、拍手喝采するホールの観衆みんなと一体になって手を叩き、あらん限りの力を絞って「ブラヴォ！」を叫んでいました。（・・・）＜13―95、圏点部分は原文でイタリック＞(2)

「喜劇」と銘打ちながらも、グリボエードフの戯曲『知恵の悲しみ』は、長い外国放浪の後に帰って来たモスクヴァで、旧態依然とした周囲の人々に溶け込むことが出来ず、恋にも敗れ、失意のうちに再び国外へ出て行く19世紀初頭の先進的な知識人の孤独な姿を描いた作品である。この戯曲のそのような側面を、10歳のアルカーヂイは鋭く見抜いている。金儲けや猟官活動に齷齪している人々によって奇人扱いされ、孤立していくチャーツキイの悲劇と偉大さを、彼は直感的に感じとっているのである。そして彼は、このチャーツキイの孤独と偉大さを、やはり外国からモスクヴァに帰って来て、やがてはまた、チャーツキイと同じように外国へ去ってしまう父ヴェルシーロフの姿と重ね合わせている。初めて実の父に会い、初めて芝居というものを見たアルカーヂイが受けた強烈な印象の中で、ヴェルシーロフと彼が演じたチャーツキイの姿は渾然となって溶け合っているのである。

更に、アルカーヂイの再会したヴェルシーロフが、真偽の明らかでない様々な醜聞にまみれているという事情を考慮に入れるならば、ここで注意すべきは、『知恵の悲しみ』においてチャーツキイが、無責任に膨らみ、広がっていく陰口や噂話によって狂人の烙印を押されてしまう点であろう（第３幕第14場～21場）。９年もの間父から遠ざかっていたアルカーヂイからすれば、様々な人から耳にする父の醜聞は、すべて「チャーツキイは気が狂った」と同断の、根も葉もない噂であるかも知れないのである。かつてあのように素晴らしくチャーツキイを演じた父は、噂どおりエムスで醜悪な所業を行った不名誉な人間であるのか、それとも、チャーツキイと同じく高い知性と誇りを持つがゆえに周囲との関係に齟齬を生じ、チャーツキイと同じく無責任な中傷に取り巻かれているのか。父ヴェルシーロフに関わるアルカーヂイの疑問は、挙げてこの一点にあったといえる。

先にも述べたように、アルカーヂイはペテルブルクに出て来てからもヴェルシーロフに関する不名誉な噂を耳にしなければならなかった。あるいはソコーリスキイ老公爵から、あるいはクラフトから、あるいはスチェベリコフから、彼はヴェルシーロフの悪評を吹き込まれ、ヴェルシーロフに対する反発を募らせていく。だが、第一部の終わりでは、アルカーヂイのこの反発は急速に和らげられる。裁判に勝ったにも拘らず、この裁判で得た財産の相続権をヴェルシーロフがそっくりセリョージャ公爵に返上し、その上で、かつての頬打ちの侮辱を雪ぐために改めて公爵に決闘を申し込んだことがその主たる契機であったが、その他に、リーヂヤを誘惑し、子供を産ませたのが実はセリョージャ公爵であり、ヴェルシーロフはこういった事情をすべて呑み込んだ上で彼女に結婚を申し込み、リーヂヤ亡き後はその子供を引き取っていたのだということも判明したからである。その「理念」とは裏腹に感激し易いアルカーヂイは、ヴェルシーロフを「無限に自分の上に祭り上げ」＜13―151＞、ルカによる福音書の「放蕩息子の帰還」(3)で老いた父が口にする言葉をもじって、「死にて復生き、失せて復得られ」たりと歓喜する。＜13―152＞この時のアルカーヂイの意識の中で、甦り、見出された父とは10歳の時に彼が歓喜しながら受け入れたチャーツキイとしての父なのである。

2

しかしながら、この第一部の終わりでは、アルカーヂイはヴェルシーロフの実像を見誤っているといわねばならない。リーヂヤやセルゲイ公爵との関係についての疑念は払拭されたとしても、カチェリーナ・アフマーコヴァにヴェルシーロフが情熱を燃やしていたという噂については、未だ肯定も否定もされていないからである。意識的にか無意識的にか、この時のアルカーヂイは、ヴェルシーロフがカチェリーナに執着しているか否かに何の関心も払おうとしない。この時既に自身もカチェリーナを愛し始め、やがては「蜘蛛の魂」のごとき情欲(4)を燃やすことになるアルカーヂイは、ヴェルシーロフにも同じ「蜘蛛の魂」が宿っていることを疑おうともしない。自分の母ソーフィヤを愛しながらもカチェリーナに引かれるという愛情の二重性こそが、ヴェルシーロフという人物の分裂を最も雄弁に物語っているにも拘らず、彼

は父のその部分にあらためて思いを致そうともしないのである。そこにアルカーヂイの19歳という年齢が大きく作用していることは言うまでも無いが、彼にとっての父の原像がチャーツキイであったことも無縁ではあるまい。かつての恋人に裏切られたチャーツキイは、心に深い幻滅を抱きはしても、彼女に執着することはない。むしろチャーツキイは翻然としてかつての恋人を侮蔑し、別離の言葉を叩きつける。こと愛欲に関しては、ヴェルシーロフほどチャーツキイ像から懸け離れた人物はいないのである。

ところでチャーツキイというプリズムを通してヴェルシーロフを見ようとしたのはアルカーヂイだけではない。19世紀ロシアの文学者たちにおけるチャーツキイ像の変遷を概観した A. B. アルヒーポヴァは、ヴェルシーロフ像には「チャーツキイの多くの特徴が反映」しているとし、農奴解放期にヴェルシーロフがすすんで農事調停官を務めたこと(5)や、周囲に溶け込めずに外国暮らしをしたことなどと併せて、若き日に舞台でチャーツキイを演じた事実を論拠として挙げている。更に同氏は、ヴェルシーロフが自らを、ピョートル大帝の西欧化政策から100年の後にロシアに生まれた「世界苦のタイプ」、「ロシアの未来を内包」する「全部で千人そこそこ」＜13―376＞のタイプに属すると自認する場面（第三部第七章）を取り上げ、創作ノートのこの場面に相当する部分で、ドストエフスキイがこのタイプの嚆矢としてチャーツキイの名を挙げている＜16―417＞ことを指摘した上で、ドストエフスキイにとってチャーツキイは単にデカブリスト時代の歴史的典型ではなく、より普遍的に、彼が晩年の『プーシキン演説』(6)で剔抉した「ロシアの放浪者」に属するものなのだと結論付けている。(7)

確かに、ヴェルシーロフの略歴を一瞥すれば、そこに浮かび上がってくるのは、若き日のドストエフスキイが呼吸したのと同じ40年代の理想主義的な空気を生涯息づきつつ、自身が為すべき仕事を求めて終に得ることの出来なかった「放浪者」の姿である。(8) その意味でヴェルシーロフにとってチャーツキイは大いなる先達ではあるといえよう。また、ヴェルシーロフが自らその一員であるという「世界苦のタイプ」が、『プーシキン演説』でドストエフスキイが論じた「故国の地における不幸な放浪者、民衆から引き離されたわれわれの社会(貴族社会を指す―――松本)に歴史的必然性によって現れた、

歴史的なロシアの受難者」＜26―137＞とほぼ重なり合っているのも確かである。しかしながら、チャーツキイとヴェルシーロフの近親性を強調する余りに、前者を「ロシアの放浪者」に繰り込んでしまうことは、ドストエフスキイが『プーシキン演説』で意図したこの「放浪者」タイプの批判、ひいては『未成年』で企図したヴェルシーロフ的タイプの批判の矛先を鈍らせる惧れがある。

『プーシキン演説』の中でドストエフスキイは、「ロシアの放浪者」のタイプを肯定的なものとして評価したわけではない。ここで彼は、ロシアの民衆や大地から遊離してしまった「ロシアの放浪者」が辿らざるを得なかった運命を解説し、かかるタイプの貴族的インテリゲンツィアが自らの傲慢さを捨てて民衆と融合することを奨めているのである。たとえば、『ジプシー』（1824）の主人公アレーコは、ドストエフスキイの解釈によれば、「まるまる一世紀の間に勤労の習慣をなくし、文化を持たず、閉ざされた壁の中で女子学生のように生い育った」階級の一人であり、「真理は何よりも先ず自分自身の内にあることを決して理解できず」、「法律なしで」暮らしているジプシーの群にこそ真理があると考えて身を投じたものの、「その野生の自然の諸条件」(婚姻に縛られない男女関係)に触れるや否や嫉妬の刃を振るって己が手を血に染め、ジプシーの族長から「傲れるお方よ、我らから離れなされ」と言い渡された＜26―138～139＞。祖国での勤労を知らず、自らを服従させることを知らず、「悪意に満ち、傲慢で、代償を払うことなど考えもせずに、ただで生命を要求」＜26－139＞したがゆえにアレーコの受けた罰がこれであった。また、『エヴゲーニイ・オネーギン』（1831）の主人公、「抽象的な人間」で「生涯にわたって心休まらぬ夢想家」＜26－140＞であるオネーギンは、その傲慢さのゆえに一度は田舎貴族の娘タチヤーナの愛の告白を斥け、「世界的憂悶を抱き、愚かしい悪意のうちに流された血で両の手を染めて、祖国を放浪しに」＜26－141＞出掛けたが、放浪を経て首都に帰ると、社交界という舞台装置の中で今は公爵夫人となった彼女をあらためて見出し、その愛を乞うて今度は逆に拒絶される。ドストエフスキイに言わせれば、タチヤーナは「彼が自分のことをありのままの自分ではなく、何か他のものと取り違えていること、彼が自分のことさえ愛してくれてはおらず、ひょっとし

たら誰のことも愛してはいない、それにこんなに酷く苦しんではいるけれども、誰かを愛する能力がないのかもしれないこと」を知っており、仮に自分が愛を受け入れて随って行ったとしても「彼は明日にでも幻滅し、自分が夢中になった女を冷笑するように眺めるであろう」＜26―143＞ことを知っているのである。ドストエフスキイの極めて独創的な解釈によれば、二人の「放浪者」アレーコとオネーギンは、その傲慢さや怠惰、そして書物的抽象性のゆえに、プーシキンによって罰せられていることになる。だが、彼らの悲劇は、旧態依然としたロシアに幻滅し、倉皇として再び外国に旅立つチャーツキイの悲劇と同じではない。『知恵の悲しみ』においてチャーツキイは常に批判し、嘲笑する側にあり、笑われるのは彼を取り巻く人々である。換言すれば､チャーツキイは作者グリボエードフによって罰せられてはいない。ロシアに生まれた「全部で千人そこそこ」の「世界苦のタイプ」に自ら属しているとヴェルシーロフに言わせるときに、ドストエフスキイの頭に「ロシアの放浪者」というイメージがあったとしても、その「放浪者」の面貌はチャーツキイよりもむしろ、そのようなタイプに属していることそのものが悲劇の胚珠となったアレーコやオネーギンに似ている。

ヴェルシーロフはあくまでも舞台の上でチャーツキイを「演じた」のであることを忘れてはならない。舞台上のヴェルシーロフに魂を震撼されたことのあるアルカーヂイが第一部の終わりで彼の実像を見誤ったように、ヴェルシーロフとチャーツキイを近接させるアルヒーポヴァは、ヴェルシーロフ像を余りにも屈折のないものに見てしまっている。

3

ドストエフスキイが『プーシキン演説』で批判的に描いたオネーギンとヴェルシーロフは共に「抽象的な人間」で「生涯にわたって心休まらぬ夢想家」であるが、この二人の「放浪者」は、その女性への求愛の姿においても似通ったものを持っている。田舎の領地で初めてタチヤーナに会い、彼女から真情のこもった手紙を受け取ったオネーギンはその求愛を斥け、「自制することをお学びなさい」と「お説教した」(9)。この時のオネーギンは年長者として、また、社交界で恋の経験を積んだ者として、自分をタチヤーナよりも高

い位置において彼女に接している。彼は彼女の前で一貫して精神的権威として振る舞っているが、ドストエフスキイの言葉を借りれば、オネーギンは「この哀れな少女のうちに非の打ち所のない完成を見分けることが出来ず」、「殆んど軽蔑した」＜26―140, 143＞のであった。だが、放浪の旅から舞い戻り、社交界の眩い光の中でタチヤーナに再会したオネーギンは、一転して彼女の愛情を乞う立場に身を置き、その足元に身を投げる。今や自制を求めて「お説教」するのはタチヤーナの役割であり、この時乞う者と与える者の位置は逆転しているのである。

一方、エムスにおけるヴェルシーロフとカチェリーナ夫人との交友がどのようなものであったかについて、『未成年』の中では終に正確な情報が与えられていない。とはいえ、一度はヴェルシーロフを「愛していた」＜13―415＞というカチェリーナが「あなたは出会った最初の頃から私の頭にショックを与えました」＜13―416～417＞、「私はあなたのことをこの上もなく大事な方として、この上なく偉大な心をお持ちの方として、私が尊敬し愛することの出来るすべての中でも神聖なあるものとして思っていくつもり」＜13－416＞だなどと話していることを考えれば、少なくともエムス時代の初期には、ヴェルシーロフは彼女に対して熱烈な求愛者としてではなく、何らかの精神的な権威として振る舞っていたことが推測される。そしてこの推測は、エムス時代のヴェルシーロフが「羽根の生え揃っていない娘たち」に「神様のお説教」をしていた＜13－31＞というソコーリスキイ老公爵の言葉によっても多少裏打ちを得られるといえよう。だが、小説の第三部第十章で描かれる、約２年ぶりのカチェリーナとの会見において、終始威圧的な態度こそ保ってはいるものの、ヴェルシーロフはオネーギンのように愛情を乞う者に転身している。オネーギンがそうしたようにカチェリーナの足元に身を投げることはなくとも、かつての精神的な権威は、ここでは物乞いのように彼女の愛をねだっているのである。そのことは、この場面での「施し」（милостыня）という語の使用に明瞭に現れている。(10)

まず第一に、カチェリーナが自分との会見に同意し、わざわざ会いに来てくれたこと自体をヴェルシーロフは彼女の「施し」であると受け留めている。

「(・・・)まあ、過ぎたことは過ぎたこと、今あることは明日には煙の如く消え失せるとしましょう、―――そうであるとしましょう！同意しますよ、だってこれ（二人が２年間会わなかったこと―――松本）に代わるものなど無いのですからね、でも今は何も無しに行ってしまわないで下さい」と、ほとんど懇願するように、不意に彼は言い足した。「施し（милостыня）を与えてくださったのなら、お出で下さったのなら、何も無しで行ってしまわないで下さい。私にひとつ答えてください。」(・・・)＜13－414＞

話が進み、カチェリーナが、精神的な権威としてのヴェルシーロフは愛することができても、情欲に狂ったヴェルシーロフの愛情は受け入れられないことが明らかになったとき、ヴェルシーロフは求愛する自分の姿を物乞いにさえたとえている。

「(・・・)私はね、もしもそれであなたを魅することが出来るというのでさえあれば、一本足でどこかに30年も柱頭苦行者のように立ち通すことが出来ると思うんですよ... 私には分かります、あなたは私のことが気の毒なんだ、顔に書いてありますよ、「出来ることならあなたを愛するのだけれども、愛せないわ」ってね... そうでしょう？構いませんよ、私には誇り（гордость）なぞありませんから。私はね、乞食の様に、あなたからどんな施し（милостыня）でも受ける気でいるのです。いいですか、どんな施しでもね... 一体乞食にどんな誇りがありましょう？」＜13－416＞

かつての精神的な権威、「この上なく偉大な心」を持ち、「尊敬し愛することの出来るすべての中でも神聖な」人物であったヴェルシーロフが、「誇り」を捨て、自らを卑しめる様を見かねたカチェリーナは、ただの友達として別れることを提案するが、逆上したヴェルシーロフはなおも喰い下がる。

「(・・・)「お別れしましょう、そうすればあなたを愛するでしょ

う」ですか、愛してあげます、ただお別れしましょうって言うんですね。ねえ」と彼はすっかり蒼褪めて言った。私にもうひとつ施し（милостыня）を下さい。私を愛さなくて結構、私と暮らさなくて結構、またもう会うことも無しにしましょう。あなたがお呼びになれば、私はあなたの奴隷になります。あなたが私のことを見も聞きもしたくないとおっしゃるなら、すぐさま姿を消しましょう。ただ... ただ誰とも結婚しないで下さい！」＜13－417、圏点部分は原文でイタリック＞

二人の会見を隙見していたアルカーヂイは、父のこの言葉に心を締め付けられる。ヴェルシーロフが何度も口にする「施し」という言葉を、この息子は聞き逃してはいない。

（・・・）彼（ヴェルシーロフ―――松本）のこのような言葉を耳にして、僕の胸は痛いほど締め付けられた。この素朴なまでに屈辱的な懇願は、それが露骨で考え得ないものであっただけに一層哀れで、一層鋭く心に突き刺さるものだった。そうだ、言うまでもなく、彼は施し（милостыня）を乞うたのだ！一体彼は彼女が同意するなどと考えることが出来たのだろうか？それでも彼は身を低くして試みたのだ。彼は試しに懇願してみたのだ！ここまでの気の衰えは見るに忍びなかった。（・・・）＜13－417＞

この後ヴェルシーロフは発作的に彼女に脅迫めいた言葉を口にする。それは、乞食には不要のものとして抑圧されていた彼の「誇り」が、「施し」としての愛を乞う自身の姿に瞬間的に上げた叛逆の声であった。ヴェルシーロフの分裂を垣間見させるこの態度の豹変を捉えて、カチェリーナは鋭く指摘する。

（・・・）「もしも私があなたに施し（милостыня）を差し上げたりしたら」と彼女は不意にきっぱりと言った。「その施しのせいで、あ

なたは今私を脅していらっしゃるよりもっとひどく、後になって私に復讐なさるでしょう。だって私の前でそのように乞食として立っていらっしゃったことを、あなたは決してお忘れにならないでしょうから...（・・・）」＜13－417＞

その出会いの最初の時期、ヴェルシーロフはカチェリーナに対して一箇の精神的な権威として振る舞っていた。そのように振る舞っている限りにおいて、カチェリーナは彼を「尊敬し、愛する」ことが出来たといえよう。だが、小説では触れられていないが、既にエムスにおいてヴェルシーロフはそのような役割に甘んじられず、ここに引いた会見と同様な形でカチェリーナの愛を乞うたと考えられる。そしてそのことがエムスにおける二人の不和の原因であったろうことも察せられる。

自らを低くし、「誇り」を捨てて、「施し」をねだる乞食のように愛を乞うヴェルシーロフをカチェリーナが受け入れようとしないのは、実は彼が決して「誇り」を捨てることなど出来ず、ひとたび「施し」を得たならば、自分が「施し」を乞うたことに腹を立てて復讐を始めるような人間であることを見抜いているからである。ヴェルシーロフのこの心理構造は、自分が手痛い侮辱を加えた娼婦リーザに許しを乞おうとしながらも、「ひょっとしたら僕は明日にでも、今日彼女の足に接吻したことで、彼女を憎み始めるんじゃないか」＜５－177＞と思い直す『地下室の手記』(1864)の主人公のそれと著しく似通っている。この地下室の逆説家も、一人の娼婦の前で精神的優位を保ちきれなかったことを根に持ち、復讐のために彼女の真情を敢えて踏みにじったのであった。ヴェルシーロフがこの主人公と同様の、振り子のように揺れ動く感情を抱えているとすれば、終に「施し」を与えることなく去ったカチェリーナは、明日にでもオネーギンが自分を冷笑するであろうと見抜いていたタチヤーナのように、賢明に振る舞ったといわねばならない。

4

ヴェルシーロフは二人の女性への愛に引き裂かれている。ひとりはカチェリーナであり、もうひとりはアルカーヂイの母ソーフィヤである。自領の家

僕の妻であった農奴身分のソーフィヤに対する愛情を認めながらも、カチェリーナに「宿命」的に引き付けられていく自分をヴェルシーロフは如何ともすることが出来ないでいる。前節で扱ったカチェリーナとの会見に先立って、錯乱したヴェルシーロフは家族の前で「私はまるで自分というものが二つに割れていくような気がする」、「あたかも自分の側に分身が立っているようだ」＜13－408＞と自らの精神的な分裂を告白しているが、現実の行動において彼のこのような分裂を如実に表しているのが、ソーフィヤとカチェリーナという二人の女性との関係なのである。K. モチューリスキイはソーフィヤを、ヴェルシーロフの「天上の伴侶」とし、カチェリーナへの愛情を「地上的な愛」と形容しているが(11)、これは余りに抽象的な解釈であろう。ヴェルシーロフの愛情の二重性は、実は彼が貴族階級に属し、「ロシアの未来を内包」する「全部で千人そこそこ」の「世界苦のタイプ」に属しているという自負に由来している。貴族であるヴェルシーロフが愛した女性のひとりが農奴身分に属し、その間に生まれたアルカーヂイが主人公であるという『未成年』の設定そのものが、農奴解放後の貴族階級の運命をめぐる当時の議論を十分に意識したものであったことを忘れてはならない。(12) 二人の女性に対するヴェルシーロフの引き裂かれた愛情にも、作者ドストエフスキイのそのような問題意識は描き込まれているのである。

カチェリーナへの求愛において、精神的な権威者としての「誇り」を抑え付けて、ヴェルシーロフが執拗に「施し」としての愛情をねだったのは、彼がソーフィヤとの生活の中で常に「施し」を与えるものであり続けなければならなかったからである。

一男一女をもうけた最初の妻を亡くし、トゥーラにある自分の領地を訪れたヴェルシーロフが、既に家僕マカールの妻となっていたソーフィヤと関係を持ったのは26才の時である。その時ソーフィヤは18歳であった。ふたりがどういう機縁でどのようにして関係を持つに至ったのかは、明らかにされていない。ただ、グリゴローヴィチの『アントン・ゴレムィカ』（1847）に共鳴し＜13－10＞、「官位や自分たちの世襲権利や農村や、質屋さえ非難」＜13－106＞していたというヴェルシーロフのソーフィヤに対する感情が、最初は憐憫の情に近いものであったことは確かである。(13) 必ずしも美しいとい

う訳ではなかったソーフィヤになぜ心を動かされたのかについて尋ねた時のヴェルシーロフの答えを、アルカーヂイはこう書き留めている。

> (・・・)＜ヴェルシーロフによれば―――松本＞私の母は身の上の頼りない女のひとりで、好きになるというのではないが―――いや、好きになるなんてあり得ないのだ―――なぜか不意にかわいそうになるような女なのだそうだ。大人しいからかわいそうになるのかどうか、それとも他に理由があるのか、それは誰にも分からないのが常だけれども、そのかわいそうだという気持が長く続いて、かわいそうだと思いながら愛着を覚えてしまうのだ。(・・・)＜13－11、圏点部分は原文でイタリック＞

憐憫から始まった愛情が真の愛情でないとはいえない。だが、地主の「旦那様」が領地の「農奴」に感じた憐憫がすべての始まりであったという事実は、彼らの結婚生活に影を落とし続けている。農奴解放期に、全くの無報酬で農事調停官の職務を務めた後、ソーフィヤを捨て、ドイツに滞在したヴェルシーロフは、「私が理想に奉仕しているからといって、道徳的理性的存在である私は、生涯においてせめてひとりの人間でも実際に幸福にしなければならないという義務から免れるわけではない」という「書物的な思想」＜13－381＞からソーフィヤのことを思い出した。彼はソーフィヤに対する自分の愛情を忽然と悟り、彼女を呼び寄せることにするが、その時彼を苦しめていたのも、ソーフィヤの「こけた頬」であり、「彼女がいつ変わることなく私の前では卑下した態度をとり、いつもあらゆる点で自分を私よりも遥かに低いものと見なしていたことについての回想」＜13－381＞であった。そして、ソーフィヤについての「実に気の重い」思い出として、ヴェルシーロフはアルカーヂイに次のようなエピソードを語っている。

ある時、ヴェルシーロフがソーフィヤの部屋に入っていくと、彼女は珍しく何の手仕事もせずにテーブルにひじをついて何かを考え込んでいた。久しく彼女に夫らしい愛撫をしていなかったヴェルシーロフは、そっと彼女に近寄り、出し抜けに身体を抱いてキスをした。問題はその時のソーフィヤの反

応にある。

> 「(・・・)彼女(あれ)は跳び上がったよ――あの時彼女(あれ)の顔に浮かんだ喜びと幸福を私は決して忘れはしないが、だが急にそれが全部掻き消えてさっと真っ赤になり、彼女(あれ)の眼がぎらりと光ったんだ。そのぎらりと光った眼差しの中に、私が何を読み取ったか、お前分かるかい？「あなたは今わたくしに施し(милостыня)を下さいましたのね――そういうことなんですのね！」彼女(あれ)は、私が驚かせたからだと言い訳をして、ヒステリックに泣き出してしまったが、私はその時考え込んでしまった(задуматься)ほどだよ。概してこういう思い出はどれも、実に気の重いものだね、お前。(・・・)」<13－382>

「一緒に暮らしていた頃、彼女が美しい間だけは可愛がっていたが、後はわがままに振る舞っていた」<13－381>と言って憚らないヴェルシーロフの、思い掛けない久しぶりの愛撫を最初ソーフィヤは素直に喜んだ。だが一瞬にしてこの「天上の伴侶」は、彼の愛撫が愛情から為されるものではないことを、「旦那様」が農奴の自分にかけてくれるお情けであり、「施し(милостыня)」であることを悟ったのである。無論ソーフィヤの側に罪はないが、ヴェルシーロフと彼女の夫婦生活の根底には、常にこのような「施し」を与える者と与えられる者の上下関係とでもいうべきものが横たわっていた。ヴェルシーロフの側からすれば、自分が「旦那様」であることを否応なしに意識させるソーフィヤの態度は気詰まりなものであったにちがいない。最も身近な「民衆」であるソーフィヤによる「施し」の拒絶は、自分は「ロシアの未来を内包」する「千人そこそこ」の内の一人であるという彼の自負にも暗い影を投げるからである。

このことがあって後、一人ドイツに赴いたヴェルシーロフは、「こけた頬」のソーフィヤを再び手元に呼び寄せたが、彼女の到着以前に「宿命」(фатум)[14]の人カチェリーナに出会ってしまうのである。

5

ヴェルシーロフがカチェリーナに求める「施し」が、単に心理的な優位と劣位の別に由来するのではなく、実は階級的な刻印を帯びていることは、小説の第一部で語られるオーリャという少女のエピソードにおいても示唆されている。

オーリャは亡父の貸し金を取り立てるために母と共にペテルブルクに出て来たが、相手が金を返してくれないので次第に生活が困窮していった。彼女はなけなしの金を使って新聞に家庭教師の広告を出すが(15)、この広告記事をヴェルシーロフはわざわざ切り抜いてチョッキのポケットに持っていた。その後、公爵との裁判に勝訴し、金銭的に余裕の出来たヴェルシーロフはオーリャを訪ね、援助を約束し、当座の必要のために60ルーブリの紙幣を手渡してやるのである。彼女は最初のうちはこの援助の申し出を母と共に喜んでいたが、やがて考え込むようになってしまった。新聞広告を出す以前にも、父からの借金を返そうとしない商人から好色な申し出をされ、広告を出してからは、欺かれてとある娼館に引き入れられそうになった経験を持つオーリャは、ヴェルシーロフの援助の真意を疑い始めたのである。

さらに、スチェベリコフという小悪党が、ヴェルシーロフのかかる慈善の目的は女漁りだと吹き込んだことが、オーリャの疑惑の火に油を注いだ。逆上した彼女はヴェルシーロフの住所を調べ出し、彼を訪ねて60ルーブリの金をつき返すのである。居合わせたソーフィヤに向かってヴェルシーロフの隠された淫蕩な意図(と彼女は思い込んでいる)を素っ破抜いた上で、オーリャはヴェルシーロフにこう叩きつける。

> 「(・・・) もしもあなたが本当に誠実なお気持を持ってらしたとしても、それでもあたくしあなたの施し（милостыня）など欲しくはありませんわ。(・・・)」＜13－132＞

帰宅してからもオーリャは、母に同様の言葉を繰り返している。

「(・・・) たとえあの人がこの上なく誠実であったとしても、それでもあの人の施し (милостыня) なんかいらないわ！誰かが私を憐れんでくれるなんて、そんなのも厭なのよ！」<13－147>

その夜、オーリャは壁の釘にトランクの革紐を括り付け、縊死してしまうのである。

果たしてヴェルシーロフが、スチェベリコフの言うように、好色な意図をもってオーリャに援助の手を差し伸べたのかどうかについて、小説の中では明らかにされていない。だが、彼女に「あなたの施しなどいらない」と言われたヴェルシーロフは、「心底驚」き、「考え込み (задуматься)」、「何事かを思い合わせるように立ち尽くしていた」。<13－132>オーリャの自殺を知ったときにも彼は、「生涯にただ一度、善行というお節介をしたのだが・・・」<13－148>と呟いている。このような反応を額面どおりに受け取るならば、ヴェルシーロフには邪な思いは全く無かったことになる。しかしながら、ここで問題になるのは、オーリャ自身が「もしもあなたが誠実なお気持を持っていらしたとしても」「たとえあの人がこの上なく誠実であったとしても」と断わっているように、好色な意図が隠されているか否かに拘らず、ヴェルシーロフの「善行」が「施し」と受け取られ、激しく拒絶されたことなのである。(16) ヴェルシーロフの訪問を受け、一度は60ルーブリの金を受け取ったオーリャが、彼の「善行」のうちに、対等の人間同士の間には生じ得ない「施し」の匂いを嗅ぎ取ったことに、ヴェルシーロフは強いショックを感じたのだといってよい。自分の振る舞いが「施し」と受け取られる苦い経験を、ヴェルシーロフはソーフィヤとの関係において既に味わっていたからである。「施し」を拒絶するオーリャの言葉を聞いた彼が「考え込み」、「何事かを思い合わせて」いたとすれば、それは夫としての愛撫を「旦那様」からの「施し」と受け取られた思い出に関わるものに他ならない。

その若き日には1840年代の理想主義的な空気を呼吸し、「人道的な勲功を思い描」き、「善を行い、市民的目的に、最高の理想に仕えたいと願っていた」<13－106>ヴェルシーロフは、精神的にも、また実際の上でも放浪を繰り返してきた。それでも彼は、クリミア戦争が勃発すれば従軍し、農奴解

放が行われれば農事調停官として働き、今もなお「ロシアの未来を内包する」「世界苦のタイプ」の一人として憂悶を抱いている。だが、その彼の身近な人間への好意は、妻への愛撫にせよ生涯にただ一度の善行にせよ、それを受けた側には貴族階級の「施し」として受け取られてしまうのである。高い理想を抱きつつも現実においては貴族の「旦那様」として「施し」を与え続けなければならず、自分が合一したいと願う相手と対等な関係を持つことができない―――ヴェルシーロフという人物の悲劇はここにあるといえよう。カチェリーナへの恋は、この悲劇からの脱出口だったのである。だが、この恋において彼は誤った態度をとってしまった。「施し」を与える者の役割を逃れたいばかりに、彼が必死で掴み取ったのは「施し」を乞う者の役割だったのである。「英雄か、さもなくば泥濘か、中間はなかった」＜５－133＞―――空想の中で自分が果たす役割について述べた地下室の逆説家のこの言葉は、ここでもこの「生涯にわたって心休まらぬ」放浪者にぴったりと当て嵌まっている。

注

(1) アルカーヂイの抱いている「理念」の内実、及びその小説の結構との関係については、同志社大学言語文化学会発行『言語文化』第３巻第２号（2000年12月）所載の拙論『「理念」からの逸脱―――アルカーヂイ・ドルゴルーキイ論―――』を参照されたい。

(2) ドストエフスキイからの引用はすべて Ф.М.Достоевский. Полное собрание сочинений в 30-ти тт. , Ленинград, 1972-1990. によるものとし、煩雑を避けるために本文では＜　　＞内に巻数と頁数のみを記した。

(3) ルカによる福音書第15章第11節～第32節

(4) ドストエフスキイの作品世界において蜘蛛(п а у к)はしばしば情欲の象徴として用いられているが、この点に関しては郡伸哉氏の論考 《Ад у Пушкина и Достоевского》（ロシア・ソヴェート文学研究会発行『むうざ』第15号。1996年２月）がある。『未成年』の中では、自分のカチェリーナに対するひそやかな欲望（一度は彼は脅迫という手段さえ用いてその欲望を遂げようとする）をアルカーヂイは二度「蜘蛛の魂」（душа паука）と呼んでいる。＜13－306＞＜13－307＞

(5) 農奴解放時、政府は「農民に割り当てられる土地の面積と、土地利用の代償として徴収される義務」とを定めた土地証書を作成するために地主貴族の中から農事調停官、または単に調停吏（共に мировой посредник の訳語）を選んだ。ザイオンチコーフスキーによれば(ペ・ア・ザイオンチコーフスキー著、増田冨壽・鈴木健夫共訳『ロシアにおける農奴制の廃止』早稲田大学出版部、1983年)、政府は調停吏の選出を急いだが、「調停吏候補者の選択には重大な困難があった。領地を持つ貴族の大部分は改革には消極的であった」という。そして結果的には「調停吏に任命されたものの多くは農奴制擁護者であった」(205頁)。

しかしながら、一方で、ザイオンチコーフスキーは「心から農民の利益を擁護した」一部の自由主義的貴族の農事調停官にも言及し、もとデカブリストのローゼン男爵、レフ・トルストイ、バクーニン兄弟などの名前を挙げている（207頁)。また、《Советская историческая энциклопедия》（ソヴェート歴史百科事典）の記述によれば初期の農事調停官には、地主よりも解放される農民の利益になるように活動した者もいたという (т.9, с.490-491)。ヴェルシーロフに関して言えば、「最初の召集による農事調停官として」（в мировые посредники первого призыва）＜13－65＞働いたことが明記されており、彼が「農奴制擁護者」であったよりもむしろ、「心から農民の利益を擁護した」調停官であったことが示唆されている。

(6) 1880年６月にモスクヴァで挙行されたプーシキン祭でドストエフスキイが行なった講演の再録で、『作家の日記』1880年の８月の部に掲載されたもの。その題名は、正式には『プーシキン（概説）―――６月８日ロシア文芸愛好者協会の大会での講演』であるが、本論では便宜上『プーシキン演説』と呼ぶことにする。

(7) А.В.Архипова. Чацкий в интерпретации русских писателей 19 века, с.215-216;в кн. А.С.Грибоедов - Хмелитский сборник, Смоленск,1998.

(8) 『未成年』が発表された1875年を基準として、小説に描かれた出来事が主として1874年９月から1875年の春に起きたものだと仮定し、小説の処々で与えられている情報を再構築すれば、ヴェルシーロフの略歴はほぼ次のようなものとなる。

・ 1828年　誕生
・ 大学に在籍。卒業したかどうかは不明。
・ 近衛騎兵連隊入隊
・ ファナリオートヴァと結婚、退役。
・ 外国へ。
・ 帰国。モスクヴァで上流生活。
・ 妻ファナリオートヴァ死亡。
・ 1853年、25歳の時、トゥーラの領地へ赴き、ソーフィヤと内縁関係に入る。
・ 1854年26歳の時、アルカーヂイ誕生。
・ クリミア戦争時（1853～56)、一時軍に復帰。但し、クリミアには赴かず。

・ 1856年28歳の時退役。
・ 外国へ旅立つ。ソーフィヤを連れては行くが、半年間ケーニヒスベルクに放置。
・ 1861年33歳頃、最初の農事調停官として働く。
・ 「間もなく」農事調停官を辞し、ペテルブルクで様々な民事訴訟に従事。
・ 民事訴訟の仕事を放棄。ソーフィヤと別れ長期（数年）の予定で外国へ旅立つ。ソーフィヤを呼び寄せるものの、待っているうちにカチェリーナと出会い（1873年頃）、ソーフィヤはしばらくケーニヒスベルクに放置する。その後、エムスでのスキャンダルを起こす。

(9) А.С.Пушкин. Полное собрание сочинений в 17-ти тт., т.6 ,М.1937, с.79.

(10) ドストエフスキイの作品の中で＜милостыня＞という語が特別の意味を付与される例はそう多くはない。本論の趣旨に関わるものは後述するが、それ以外にこの語が特有の意味を持つのは『白痴』（1868）の、いわゆる「イッポリートの告白」におけるもののみである。ここでの＜милостыня＞は、むしろ「慈善」という意味に近く、ラスコーリニコフやイッポリートのような追い詰められた人間における「慈善」の意義についての考察を喚起する点で興味深いものであるが、本論では特に触れない。

(11) К. Мочульский. Достоевский - жизнь и творчество, YMCA－PRESS、Париж, 1980, с.429.

(12) 『未成年』が発表された当時、農奴解放の結果として既存の貴族階級の特権が脅かされたため、危機感を持った一部の貴族による反民主化キャンペーンが張られた。ドストエフスキイがこの動きに敏感に反応したことについては、Е.И. Семенов. Роман Достоевского《Подросток》, Ленинград,1979,с.15-35 に詳しい。小説の第二部第二章では、貴族としての血統や伝統に固執するセルゲイ・ソコーリスキイ公爵に対して、ヴェルシーロフが次のように説く。「わが国の貴族階級は、諸権利を失った今でもなお、名誉や社交界や学術、そして至高の理想の保護者として、最上層の階級であり続けることが出来るでしょう。ただ大事なのは、その際独立したカーストに閉じ篭もるのではないということです。そんなのは理想の死ですからね。逆に、わが国ではこの階層への門戸はもうずっと前から開かれていたのですよ。今はその門戸をすっかり開いてしまう時期が到来したのです。名誉や、学術や、勇敢さといった面でのあらゆる功績によって、わが国では誰もが最高の人間の部類に入る権利を貰えることにすればよいのです。そうすることによって、我らが階層はひとりでに、以前のように特権を持ったカーストという意味ではなく、文字通り真正な意味でのただの最良の人々（лучшие люди）の集まりに変化していくでしょう。この新しい、言い換えれば、更新された姿のおいてのみ、我らの階層は維持されるでしょう。」＜13－177～178＞『未成年』の創作ノートにドストエフスキイが「わが国には最良の人々が居なくなって

しまった(・・・)ロシアの最良の人々はひとつにならなければならない。」＜16－367＞と書き留めていることから、ヴェルシーロフのこの見解には作者自身の意見が込められているとも考えられる。

(13) 後に＜благообразие＞（端麗さ）の具現として小説に登場するマカール老人（アルカーヂイの戸籍上の父）が当時既に他に抜きん出た存在であったとしても、父の遺言によって18歳のソーフィヤが嫁いだ時、彼は既に50歳であったという事情は銘記しておかなければならない。

(14) カチェリーナとの関わりを説明する際、ヴェルシーロフが彼女のことを「宿命」（фатум）と呼び、「愛」（любовь）とか「好きになった」（влюблен）という言葉を一度も使わなかったことに、アルカーヂイは特に注意を促している。＜13－384＞

(15) 貧しい娘が、ほんの僅かな教養を頼りに、なけなしの金で家庭教師の広告を出すという設定は、『大人しい女』（1876）にも見られる。興味深いことに、この作品で16歳の家庭教師志願の娘に結婚の申し込みをする傲慢な41歳の主人公も、ただ一度だけだが「施し」という言葉を口にしている。花嫁である彼女に対して自分が余り多くを語ろうとしない理由を、彼はこう説明している。「彼女を我が家に迎え入れるにあたって、私は完全なる尊敬を望んでいた。私の苦悩に対して祈りを捧げつつ私の前に彼女が立つことを私は望んでいた――そして私にはその値打ちがあったのだ。おお、私は常に誇り高かった、私は常にすべてか、それとも無かを望んできた！（・・・）「自分で推量して、値打ちを測るがいい！」だって、お分かりでもあろうが、もしも私のほうから彼女に説明したり暗示を与えたり、曖昧なことを言ったり尊敬を乞うたりしていたら、それは施し（милостыня）を乞うたのと同じ事になるではないか（・・・）」＜24－14＞

(16) 言うまでもなく、ここにはヴェルシーロフの言う「少し辛抱の足りない」「今の若者たち」＜13－149＞の慈善一般に対する見方も反映している。『悪霊』（1872）第２部第５章では、若者の思想に影響されたヴァルヴァーラ夫人が、長年自分に寄生し、時代遅れの思想を吹き込んで来たスチェパン・ヴェルホヴェンスキイを責め立てて次のように言っている。「じゃあ、例えば、あなたは施し（милостыня）については私になんと仰ってましたっけね？ところが実際にはね、施し（милостыня）の愉しみなどというものは倣岸で不道徳な楽しみなんです。金持ちが自分の冨や権力を愉しんだり、貧乏人の価値と自分の価値とを比較して愉しむもんなんですよ。施し（милостыня）は与える物も貰う物も堕落させますし、貧困を助長するだけですから目的を果たすことも出来ないのです。(・・・)施し（милостыня）なんてものは現代の社会では法律で禁止しなけりゃなりません。(・・・)」＜10－264＞

ヴァルヴァーラ夫人に語らせることによって、ドストエフスキイは「施し」がむしろ害にしかならないという「現代の若者」の考え方を揶揄しているわけだが、

ヴェルシーロフの「施し」を拒絶して「誰かが私を憐れんでくれるなんて、そんなのも厭なのよ！」と叫ぶオーリャを描く時のドストエフスキイは遥かに真摯である。

本稿は2000年度同志社大学学術奨励研究「スラヴ世界における文化の越境と交錯――東スラヴを中心に―――」の成果の一部である。(共同研究者：諫早勇一、日野貴夫)

ВЕЛИКИЙ СКИТАЛЕЦ, ПРОСЯЩИЙ МИЛОСТЫНЮ ―О ВЕРСИЛОВЕ ИЗ РОМАНА Ф.М.ДОСТОЕВСКОГО «ПОДРОСТОК»―

Кэнъити МАЦУМОТО

В романе «Подросток» герой Аркадий Долгорукий вспоминает о том, как он, десятилетний мальчик, в первый раз встречался с родным отцом, Андреем Версиловым, только что вернувшимся в Москву из-за границы на короткий срок. Отец Версилов, еще молодой, «цветущий и красивый» дворянин, оставил сильное впечатление в сердце маленького Аркадия, но самое яркое впечатление на мальчика произвела домашняя театральная постановка, в которой Версилов играл роль Чацкого. В душе Аркадия облик отца слился с обликом Чацкого, которого, несмотря на его высокие идеалы, окружающие не понимали и встречали злобой.

Девять лет спустя девятнадцатилетний Аркадий решился начать жизнь в Петербурге, отложив осуществление своей

«идеи», отчасти оттого, что ему захотелось выяснить обоснованность слухов про поведение Версилова, особенно про его скандальную историю с генеральшей Катериной Ахмаковой. Такое стремление Аркадия объяснимо только при учете заложенного еще в детстве отожествления отца и Чацкого, поскольку и Чацкий тоже стал жертвой клеветы, будто бы он сошел с ума. Главный вопрос для Аркадия, делающего первый шаг в самостоятельной своей жизни, заключается именно в том, Чацким ли является Версилов или нет, честен ли Версилов или нет.

А.В.Архипова, отметив сходство образа Версилова с Чацким, утверждает, что Достоевский считал героя пьесы одним из «великих скитальцев», за судьбами которых впоследствии писатель следил в речи о Пушкине. Однако, нужно обратить внимание на то обстоятельство, что в конце первой части романа Аркадий, отожествляющий Версилова и Чацкого, ошибается в понимании характера отца. Он ошибочно рассматривал отца сквозь призму образа Чацкого, в котором совсем отсутствует роковая страсть, «душа паука». Отожестовление Версилова и Чацкого служит камнем преткновения не только для Аркадия, но и для А.В. Архиповой. Если Версилов, страдающий от роковой любви к Ахмаковой и просящий у нее любви, несомненно является «великим скитальцем», то его предшественником следует считать не Чацкого, а Евгения Онегина, просящего любви у Татьяны, с которой он раньше держал себя как проповедник.

Версилов, чья юность протекала в сороковые годы, бился над осуществлением своего идеала, «всего прекрасного и

высокого ». Но оторванность от почвы всегда мешала ему и вынуждала « странствовать ». И его любовь к бывшей крепостной Софье, матери Аркадия, и его доброжелательную помощь бедной Оле, против его воли, принимали за «милостыню», свысока брошенную барином. Следует заметить, что и перед Катериной он когда-то в Эмсе представлял себя проповедником, нравственным авторитетом. Но, в конце романа, прося любви у Катерины Ахмаковой, он унижается, неоднократно называет ее любовь « милостыней », что показывает его сильное желание освободить себя от роли подающего « милостыню ». Впрочем, как справедливо рассуждает Ахмакова, Версилов из-за своей гордости опять будет зол на то, что попросил « милостыню ». У него под словом « любить » подразумевается или « подавать милостыню », или « просить милостыню ». Именно в этом трагизм Версилова, « великого скитальца », оторванного от русской почвы, и, разумеется, « подпольного ».

An Alms-begging Wanderer —— On Versilov from *The Adolescent*

Ken’ichi MATSUMOTO

Key words: Dostoevsky, The Adolescent, Versilov